

されたと伝えられる。『豊西記』・『造領記』等)。城下町の隈町は田島村から町場を移して成立した町であった。『豊後国志』は「田島村大原祠側」にあった街市を竹田村に移し、「隈街」と名付けたと伝えている。

日隈城の城郭の本格的な整備は、慶長元年(一五九六)に入部した毛利高政によつて行われた。『豊西説話』には五層の天守と三層の櫓を建てたとある。

城の大手は南西側、搦手は東側で、北側に堀を設け、山頂の本丸のほか二の丸、三の丸、丹後丸、馬場などが配されていた。これらの多くは、公園として整備された今日も、多くの遺構をとどめている。特に大手の虎口の枠形は往時の石垣よく残している。

関ヶ原戦後、毛利高政は佐伯に転封となり、元和二年(一六一六)、石川忠総が豆田の北の丸山城に入部、これを永山城と改め、城下の丸山町を拡張して豆田町と改めた。これによつて日隈城の役割は終焉を迎えた。右の隈川雜詠でもこの城が詠まれている。ここでは「毛侯古戰場」とあるが、ここでは合戦は行われていない。

隈川の清流をめぐる

隈川、つまり三隈川は隈町に沿うように流れる清流である。当然のことながら、三隈川左岸一帯に展開する石井・高瀬方面への遊山・参詣にあつても大事な経由地となっていた。後述する天保二年の高瀬の釜淵や鬼城観音庵、あるいは石井の石井神社や松尾神社等への遊山の記事に見えるとおりである。これらの遊山にあたつての隈川の渡河は、单なる途中の渡河というのではなく、この川の界限の美しい風景も大切な行程にふくまれていたということであろう。

また天保十一年(一八四〇)二月の「散歩」の行程も興味深い。ここでは豆田あるいは咸宜園からの散歩の道筋が、現在にも復元できるほど克明に記されている。

二月二八日。久兵衛、伸平ト共ニ散歩ス。浪江徒ヘリ。横屋ヲ過ギ、

田島ニ至リ、稻生祠ニ謁シ、桜花ヲ觀。会処宮ニ至リ、鬼塚ニ登リ、下井手ニ至リ、隈川ヲ左ニシ、莊手川ニ傍ウテ帰レリ。往反二里ニ近シ。伸平力家ニテ飯ヲ供セリ。

これによれば、豆田または咸宜園からまず横屋を過ぎる。横屋は今日の日田駅あたり、元町周辺にあたる。ここから田島に至り、稻生祠つまり若八幡社に謁で桜花を觀る。ここから南に歩いて会処宮、そして鬼塚に登る。

鬼塚は前述のように会所宮の近くの田んぼの中にある古墳状の塚である。ここから下井手に至りここで隈川を左にし、つまり隈川の右岸を竹田村一隈町へと歩き莊手(庄手)川に沿つて帰つたというのである。

龜山に沿つて並ぶ隈町の町筋では、また度々詩会などの集いが開かれた。

・文化十四年(一八一七)

六月二十四日。隈町ニ詩会アリテ赴ク。益多從行セリ。熊谷昇地主トナリ。方山元台力隣亭ヲ暇リテ会ヲナス。亭ニ名ナシ。此時名ケテ水明亭ト云フ。会スル者、館林清記、憎恵禪、蒲池久市。方山寛吾ナリ。時ニ立秋前一日ナリ。余力詩ニ曰ク。(略)

・十月九日。益多ヲ携ヘテ館林清記ヲ訪フ。遂ニ清記ヲ引イテ。隈川ヲ渡リ。穴平ノ觀音庵二会ス。会スル者、熊谷升、児玉茂、憎恵禪。方山寛吾。蒲池久市ナリ。予十二歳ノ時。館林文之進ニ從ツテ。此ニ來

リ。又錢塘西洋ノ一老。及ヒ羽野養詢・僧法天ナドト来リ遊ヘリ。今ヲ距ルコト廿五年。旧遊ノ人ヲ思フニ。一モ存スル者ナシ。感嘆三堪ヘス。詩ニ曰ハク。

孤亭倚翠微。清賞澹忘帰。風篠伝寒擣。姻松収夕霏。

僧亡誰煮茗。客到自推扉。欲話卅年夢。同遊人總非。

・文政十一年(一八二八)

七月八日。隈町西教寺ニ詩会アリテ趣ケリ。謙吉、直衛、春二郎從行ス。森成策主トナル。会者、熊谷見順、児玉茂、館林清記、糸聞恵ナリ。余力詩ニ曰ク

西風昨夜拂余炎。遊賞今朝四美兼。